修士論文要旨

子どもの頃の調理経験がその後の発達に及ぼす影響

The influence of cooking practice in childhood on later life from the perspective of developmental psychology

手島　陽子（Yoko Teshima）　　指導：外山　紀子

目的　４つの個別研究を通じて，調理にかかわることが子どもの発達にどのような意味をもつのか，どのような環境が子どもの調理を後押しするのかを検討する。

個別研究の位置づけ　第１研究では大学生を対象とした質問紙調査を行い，幼児期・学童期・青年前期・青年後期の４つの時期を通して，調理行動と調理にかかわる心理がどのように発達していくのか，調理が青年期の自尊感情と自立にどのように関連するかを検討した。家庭の食環境は子どもの調理と関連することが示されているが，第２研究では，家庭の食環境の一側面である母親の調理に焦点をあてた。第３・４研究では，子どもの調理の習得をみるために，子ども料理教室に参加すること（第３研究），幼児が包丁で野菜を切る行動（第４研究）の特徴を検討した。

第１研究（大学生の調理と食に関する質問紙研究）　大学生の調理に関する過去と現在の特徴，調理と青年期の自尊感情や自立との関連性をみるために，大学生126名に質問紙調査を実施した。その結果，対象となった大学生は子どもの頃，調理に興味をもち，家庭の食環境は概ね良好だったが，家族は子どもが調理にかかわることに積極的でなかったことが示された。また，家族の規範的な食事に対する意識の高さが，子どもが調理にかかわる機会を減らし，機会の少なさが調理に対する自信の低さを導いたのではないかと考えられた。パス解析の結果，子どもの頃の調理が後の発達時期の調理に影響を及ぼすこと，家庭の食環境が調理に影響を及ぼすこと，調理が自尊感情や自立に影響を及ぼすことが示された。そのほとんどは正の影響だったが，子どもの頃の調理の補佐的な手伝い（調理付随行動）については，青年後期の自尊感情に負の影響を及ぼしていた。この点については，家庭の食環境の基礎となる親子関係の質を考慮しなければならないことが課題として残った。

第２研究（母親の食写真研究）　家庭内で調理することと食事の質との関連性をみるために，母親42名に対する食写真調査を実施した。これは，連続する５日間，摂取したものを全て写真に撮ってもらうという調査法である。その結果，家庭内で調理した食事は食事バランスがよく，共食者がいることも多いことが示された。母親が調理することが多ければ子どもが調理にかかわる機会も多いと考えられる。また，母親の食事バランスがよければ子どもにもバランスのよい食事が提供されている可能性も高いだろう。これらの結果は，家庭内で調理することが子どもにとって一定の意味をもつことを示唆するものだった。

第３研究（子ども料理教室に関する質問紙研究）　子どもが調理を習得する場のひとつである子ども料理教室をとりあげ，料理教室に子どもを通わせている保護者37名（料理教室群）と通わせていない保護者43名（非料理教室群）に対する質問紙調査を実施した。その結果，料理教室に通っている子どもは通っていない子どもより，調理の心理と行動に関する多くの項目で高い得点を示し，調理頻度も高かった。これらが料理教室に通った成果であるかどうかは本調査の範囲では明らかでないものの，料理教室に参加したことにより子どもと家族が得たと保護者が考えているものは少なくないことが示された。

第４研究（幼児の調理場面の観察研究）　幼児が包丁を操作する場面を約半年間，縦断的に観察を行った。分析条件を満たした２名の幼児の行動を，ELANを用いて分析した結果，経験を積むにつれてより速く切れるようになり，リズムも整うようになることが示唆された。包丁の動きについては，料理教室などでよいとされる標準的な動きのパターンにスムースに移行する側面とそうでない側面があった。後者については，幼児の身体的特性に合わせた子どもなりの適応的な選択の結果と解釈できるのではないかと考えた。

総合的考察　本論文では，幼少期から調理にたずさわることによって，後の発達時期における調理行動や調理にかかわる心理，さらには青年期の自尊感情や自立に正の影響を及ぼすことが示された。また，子どもの調理に対して，家庭の食環境（共食することや食べながら話をすること，料理に配慮すること等）による影響が小さくないことも明らかになった。調理の発達を後押しするためには，調理の環境を子どもに身近なものにすること，子どもが実際に調理する際には，標準的なやり方を押し付けるのではなく，子どもの特性にあわせた援助を与えることが重要なことも示唆された。ただし本論文では，親子関係の質や家庭の雰囲気等，調理の発達と習得の基礎にある変数を検討できていない点が課題として残されている。生涯発達という視点にたった場合には，幼児期だけでなく他の発達時期における調理の習得過程の分析も必要だろう。今後の課題としたい。